



# IL FU MATTIA PASCAL

*Di Luigi Pirandello*

# LA VIA DEL MALE

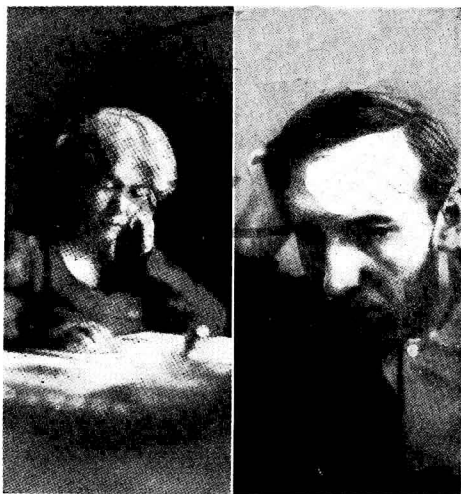
*Di Grazia Deledda*

ルデンラピ  
ルカスパーセ死

譯 孝 純 崎 岩

著 ダ ッ レ デ  
道 の 惡

譯 孝 純 崎 岩・馬 生 島 有



ダ ッ レ デ

ロルデンラピ

版 出 社 潮 新

非賣品

第二期  
世界文學全集(16)

死せるパスカル  
惡の道

第十八回配本

昭和七年六月十三日印刷  
昭和七年六月十五日發行

植木製本所納

翻譯者

有島生馬  
岩崎純孝

發行者 佐藤義亮

東京市牛込區矢來町

發行所 新潮社

電話牛込

八八八八八  
〇〇〇〇〇  
九八七六五  
番番番番番

振替東京 二三、四五〇番

## 解 説

### 一、デレツダとその作品

グラーツィア・デレツダ(Grazia Deledda)は、一八七五年十一月二十一日伊太利サルデーニャ島のヌラーロと云ふ山間の田舎町に生れた。彼女は小學校教育しか受けてゐない。が、藝術的な天性は、サルデーニャの典型的な農夫としての祖父、サルデーニャ特有の即興詩人としての父から受け嗣いだのであらう。

彼女は短い自傳のうちにかう述べてゐる。

「私の父も非常に聰明な人だつた。父は、自分の生涯を何度も私に物語つてくれた。彼は地方の即興詩人であつた。どんな物事にも、詩人的な資質から、彼は、馬鹿々々しい程の親切を人に示すのだつた。何故なら、彼が誰にでも信頼されるからだつた。そして誰に對しても同情してしまひ、却つて皆んなから騙だまされるまゝになつてゐた。

「私達の家は、一種の小さな無料宿泊所だつた。ヌラーロ附近の二十ぶいの在ありから、お客さんが一杯やつて来て、二日、三日、中には十日も滞在して行くのだつた。彼等は却々特徴のあるタイプの人々で、平民、ブルジョワ、僧侶、貴族、傭人——さう云つた人々のことを、私はよく覚えてゐる。

「父が死ぬと、私達の家には来る人が少くなつた。私は作家としての道の方へ足を入れはじめた。」

彼女の書いてゐるところに依れば、満十五歳そここで、短篇を書いて「子供の樂園」なる雑誌に發表したと云ふ。恐らく是は、少女小説めいたものだつたに違ひない。ルイーヂ・ルツンが著した「小説家」と題する評傳中には、十七

歳にして物を書いたとしてあるが、兎に角、彼女の最初の短篇小説集「王者の戀」は一八九一年に出版されてゐる。是で見ると數へ年十七歳の時であるから、滿十五歳から書き出したと云ふデレダの言葉を信じていゝであらう。次いで長篇「サルデーニヤの花」を一八九二年に、短篇集「サルデーニヤ物語」を一八九四年に、長篇「正直な心の人々」を一八九六年に出版してゐる。作家としてのスタートの早かつたことは、一寸他に類がないやうである。

彼女は一九〇〇年に、伊太利ロムバルディア地方の人マデザーニと結婚して羅馬に住んでゐる。然も結婚以後も、次に、故郷サルデーニヤを描いた作品を発表しつゞけて、郷土作家としてのみならず、世界的な女流作家として、現在伊太利文壇に君臨してゐる。一九二七年度のノーベル賞金を受與されたことは良く人の知るところであらう。その疲れを知らぬ筆力、嚴正リアリズムから織りなされる物語りは、實に驚異に値ひすると云ふべきである。

彼女を文學史的に見れば、伊太利にはじめて自然主義・寫實主義を起したジョヴァン・ヴェルガの後繼者と云ふことが出来る。即ちヴェルガは、郷土シチリヤの人情・風物を、あるがまゝに描き出して、農民文學・郷土文學の雄としての名を擅ま<sup>て</sup>まゝにしてゐるが、デレダはサルデーニヤを描くことに依つて、はるかに文學上の先輩ヴェルガの域を摩してゐると云ふべきである。

上記の如く、デレダの數多くの作品は、ほとんどすべてサルデーニヤ物であるが、近年に至つて、長篇「エジプトへの逃走」の如く、題材を廣く地中海の外に求めた作品や、短篇集「詩人の家」や「愛の封印」に見られるやうな、ユーモア風の作品を發表してゐるのは注目すべきである。

さて、彼女の藝術が、その直線的な單純性に依つて、廣く人々に認められもし賞讃もされてゐることは否定すべくもない。かうした單純性は、筋の複雑、技巧的な構成、突飛な空想に依つて壓搾されてゐるやうな他の文學に對して、

優位な好感を持たれる所以である。然しデレダの單純性は、長い間の彼女の文學上の訓練の成果である。然も彼女の作品には、何時も抒情的な氣分がみなぎつてゐる。その氣分は新鮮で純粹である。彼女の功績は、單純な即興的な物語作者としての彼女が、次第に少しづつ、藝術と回想の物語作者に變化して來たことに存する。彼女は、その多くの作品を見れば分るやうに、サルデーニヤ島の農民の叙事史を歌ふ詩人であると云へる。然もかうした叙事史は、未だ嘗て活字になつたこともなく、たゞ口から口に傳つてゐたもののみである。彼女はさうした叙事史を、平明に抒情的に文學の上に現したのである。現したばかりでなく、文學としての價値に迄再現し得たのである。

然しながら、彼女が單なる詩人でないことは、その作品に現れる宗教的感情の眞摯さに依つても、理想と正義の觀念が所々に閃くことに依つても視はれるであらう。我々は、彼女に理想を求める必要も意識もないが、彼女が單にサルデーニヤの風物の描寫家でないことを云ひ得れば足りよう。

彼女の傑作は一般に「灰」「エリアス・ポルトルウ」「風笛」「惡の道」があげられる。

「惡の道」(La via del male)に現れるマリイヤの性格、そしてピエトロの性格は、サルデーニヤ島の農民としての一つの典型である。情熱のために身を燒き人殺しをもしでかすピエトロ、罪と知りつゝ罪人とも夫婦になるマリイヤ、かうした性格は、彼女の作品のいづれにも、違つた環境と事情のもとに描かれる。無智、野性、はげしい情熱——此處に我々は原始的な野蠻人を、文明から遠ざかつた野蠻人を見る。岩山と高原と牧場と葡萄園と、青き空と遠き山々と、遠い過去の因襲と宗教的儀式とに取りまかれた彼等サルデーニヤ農民の赤裸々な記録——これこそ、デレダの「惡の道」であり、デレダの作品に描かれるすべての基調である。

「惡の道」は一九〇六年に出版せられてゐるが、一九〇四年——五年にかけて書いたものと考へられるから、既に彼

女の藝術力の旺盛期に出来あがつたものと云ふことが出来よう。

のみならず此の一篇を讀めば、デレッダのほとんどすべての作品を知ることが出来、そしてサルデーニヤ島の姿を、その自然と人事と共に知ることが出来る。

左に彼女の全作品を年代順に列記する。

- 短篇集「王者の戀」(Amore reale)(一八九一年)
- 長篇「サルデーニヤの花」(Fior di Sardegna)(一八九二年)
- 短篇集「サルデーニヤ物語」(Racconti Sardi)(一八九四年)
- 長篇「正直な心の人々」(Anime oneste)(一八九六年)
- 長篇「寶」(Il tesoro)(一八九七年)
- 短篇集「客」(L'ospite)(一八九八年)
- 短篇集「誘惑」(Le tentazioni)(一九〇〇年)
- 長篇「山の老人」(Il vecchio della montagna)(一九〇一年)
- 長篇「離婚の後」(Dopo il divorzio)(一九〇二年)
- 但し「海港の難船者」(Naufraghi in porto)と改題され一九〇七年に再刊さる。
- 長篇「エリアス・ポルトルウ」(Elias Portolu)(一九〇三年)
- 長篇「灰」(Cenere)(一九〇四年)
- 短篇集「生命の賭」(I giuochi della vita)(一九〇五年)

- 長篇「ノスタルジャ」(Nostalgie)(一九〇五年)
- 長篇「悪の道」(La via del male)(一九〇六年)
- 長篇「過去の影」(L'ombra del passato)(一九〇七年)
- 長篇「常春藤」(L'edera)(一九〇八年)
- 短篇集「祖父」(Il nonno)(一九〇八年)
- 長篇「我等の主人」(Il nostro padrone)(一九〇九年)
- 長篇「國境ひ迄」(Sino al confine)(一九一〇年)
- 長篇「沙漠の中」(Nel deserto)(一九一一年)
- 長篇「鳩と鷹」(Colombi e sparvieri)(一九一二年)
- 短篇集「明暗」(Chiaroscuro)(一九一二年)
- 長篇「風笛」(Canne al vento)(一九一三年)
- 長篇「他人の罪」(Le colpe altrui)(一九一四年)
- 短篇集「隠し子」(Il fanciullo nascosto)(一九一五年)
- 長篇「マリアンナ・シルカ」(Mariann Sirca)(一九一五年)
- 長篇「橄欖畑の火事」(L'incendio ne l'oliveto)(一九一八年)
- 中篇「息子の歸宅・盗まれし子」(Il ritorno del figlio. La bambina rubata)(一九一九年)
- 長篇「母」(La madre)(一九二〇年)



- 短篇集「悪い仲間」(Cattive compagnie)(一九二一年)
  - 長篇「孤獨な男の秘密」(Il segreto dell'uomo solitario)(一九二二年)
  - 長篇「生ける人々の神」(Il Dio dei vivi)(一九二二年)
  - 短篇集「森の中の笛」(Il flauto nel bosco)(一九二三年)
  - 長篇「首飾りの踊り」(La danza della collana)(一九二四年)
  - 長篇「エジプトへの逃走」(La fuga in Egitto)(一九二五年)
  - 短篇集「戀の封印」(Il sigillo d'amore)(一九二六年)
  - 長篇「アンナレーナ・カルミーニ」(Annalena Biliani)(一九二七年)
  - 長篇「老人と子供」(Il vecchio e i fanciulli)(一九二九年)
  - 長篇「正義」(La Giustizia)(一九二九年)
  - 短篇集「詩人の家」(La casa del poeta)(一九三〇年)
- 以上のほか一二の脱落があるかも知れぬが、調べられた限りの作品が是である。(有島生馬)

## 二、ピランデルロとその作品

ルイーヂ・ピランデルロ(Luigi Pirandello)は、伊太利半島の南端に接するシチリヤ島のジェルジェンティ市に、一八六七年六月廿八日に生れた。日本流に云つて當年六十五歳になるわけである。

彼は獨逸のボン大學に學び、哲學と言語學の學位を得、廿四歳にして羅馬の女子高等師範の教授となり、伊太利文

學の講義を受け持った。そしてその傍ら詩や小説を書いてゐたのである。

若い時代の彼の文學のカテゴリイは、近代伊太利文學の雄で寫實主義の始祖ジョヴァンニ・ヴェルガに依つて、一八八〇年頃提唱された田園文學運動に屬してゐる。然し彼はその修業時代から、凡そ田園文學とは正反對な人生の苦惱的精神にみちた彼獨特な奇妙な世界を有つてゐた。かうした世界はベーンソスに富んではゐるが作者の同情があまりに教訓的で明瞭しすぎてゐる他の田園派の文學と、一致しないのみならず、貧乏人階級に同情の眼を向けこそしたが天才的でも複雑でも悲痛でもないヴェルガの作品とも、一致してゐないのである。既にその當時から、彼は情熱的で天才的な人生の探究者であつた。かくして熱心な人生の探究を心がければ心がける程、彼は人生の矛盾や撞着や馬鹿げたことに氣附いた。そして彼の感情は、その底に冷やかさと殘酷さを持ち、嘲笑的になり皮肉になり道化的になつた。かくて彼は、重苦しいユーモア作家、殘酷な冷めたいユーモア作家と云はれたのである。彼は酬いられざるその努力を長年の間續けてゐた。そして一二冊の短篇集を世に出すうちには、悲劇の裡に涙を、甘酸っぱい涙を伴はしめるやうな、彼が現在迄全作品に一貫させてゐる特質を持たせた傑作を二三書いたのである。ピランデルロの描く人物は、死と狂氣に近い不健康な突然の嗤笑を爆發させたり奇妙な身振りをしたりする。是を嚴密な意味で云へば、彼の扱ふ人間は、或ひは狂人であり變質者であり性格破産者である。そこに漲るものはグロテスクなユーモアであり、バセティックな涙である。

が、彼のユーモリズムは、理想と現實との間の正當な哲學的對照から爆發するのではなく、赤裸々な生命と人間にかぶさる影との二元論から生れるのである。或ひは又、人間の赤裸々な本能と、生活形式との葛藤から生れるのである。彼の著「ユーモリズム」に依れば、次のやうな彼の思想が抽出される。自然界の他の生物は、たゞ單純に生きてゐ

るにすぎないが、是に反して人間は生きて居り生きてゐることを感じてゐる。従つて人間は生活することと生活を感ずる事の二つに解剖され得る。即ち換言すれば、生命と生命を感ずることの二つに解剖出来る。此の生命或ひは生活その物と、生命又は生活の感情とは、人間の中で相對立する。此の生活の感情とは、知識とか思想とか良心とか回想とかの謂ひである。然も此の二つの對立の中には、主觀的で變りやすく、多種多様な此の生活感情が、人間以外の所に客觀的に存在する實在の如く思ひこませる幻影を伴ふものである。是が即ち人間に不幸の起る最初の原因である。然も人間は、その生活感情又は生活意識に依つて、生命の流れ、或ひは本能の流れを統整して不變の形式の中に押し込めようとす。即ち一定の形式の中に押し込めようとす。然らばその形式とは何かと云ふに、それは人間の衣服であり習慣であり傳統であり住居であり社會の法則である。彼はかゝる二元者論なのである。

彼の作品のあらゆるものは、戯曲「作者を探す六人の登場人物」にしる、「エンリーコ四世」にしる、「死せるパスカル」にしる、生活と生活形式の葛藤であり、そこに生れる悲劇であり喜劇である。

彼は短篇「聖燭節」の中でかう云つてゐる。「あらゆる事物、あらゆる物體、あらゆる生命は、それが死滅の灰に歸する迄は、かくの如き、そしてかくの如き以外にはあり得ぬ生活形式の苦惱を持つてゐるものである。」そして同じく短篇「畏」の中で、「あらゆる形式は死である。我々はすべて畏に囚はれ、そして決して止まることを知らぬ生命の流れから抛り出され、死への道を定められた存在である。」と書いてゐる。

上記の如く、彼は人間の生活本能と生活形式の矛盾と葛藤を眺める毎に、一種の虚無を厭世を感じてゐるのである。此の厭世主義は、従つて強い色彩を持つてゐないが、明らかに彼の人生觀として眺められる所の一つであり、且又、極端な個人主義の意識さへも見られる。さうして絶えず人生に、奇抜さ、面白さ、幻想を探し求めてゐるのが彼であ

る。此の意味で彼の文學は、反自然主義の立場に立つたものと云ふ事が出来る。彼の傑作「死せるバスカル」は、在來の文學の聖壇から、自然主義の坊主共を叩き出したと云はれてゐるのも宜やかなのである。

さて彼は長年の間かうした小説を書いてゐたのであるが、特異な作家として文壇的に存在してゐただけで、華やかな名聲には伴はれなかつた。然しそのうちに、彼は劇を創作し出した。此の時が四十六歳だつたから、我が國の正宗白鳥とは經歷が似通つてゐる。そればかりでなくその文學にも似通つてゐる點があると思ふが、今はそれについて述べるのは止めよう。その第一作は「醫師の義務」で一九一三年のことである。それから次々に「若しさうでなければ」(後に「他人の理窟」と改題)、「貴方がさう思ふなら、その通り」「正直の快樂」「が大したことではない」「役割の遊戯」「接木」「人間と獸と道德」「すべて是で良し」「昔の如きも昔より良し」等を發表し、一九二一年にピランデルロを世界的にした「作者を探す六人の登場人物」を舞臺にのぼせた。此の作が巴里と倫敦で上演されるや、その怪奇な藝術のために異常なセンセーションが捲き起された。かうして次の作「エンリーコ四世」「各人各説」に依つて、名聲が世界に喧傳され、ピランデルロは歐洲大戰後突如として現れた作家の如く言はれるに至つたが、事實今迄述べて來た如く決してさうではないのである。その作品の内容も彼の思想も、長い間彼が小説で扱つて來た内容とほとんど變つてゐない。此の意味で、彼の劇は彼の小説の延長であり、彼の劇の根本を知るためには、少くとも彼の小説を読む必要があるのである。

然しながら彼の劇の形式は、在來の劇の形式を根本から改革したもので、その意味では古い劇の革命家としての功績は没することが出来ないであらう。

かくて彼はムツリーニの共鳴を買ひ、一九二五年政府の援助的資金を得て、羅馬に藝術座を組織し、自らが舞臺監

督となつて主宰した。そして自國內の巡業はもとより、劇團藝術座を率ゐて、巴里・伯林・倫敦・南米に迄巡業して好成績を収めた。然しながら、自國內の藝術座の仕事は——政府の援助金の不定等の原因もあり——次第に經營上の困難に陥り出し、一九二八年に解散してしまつた。目下の彼は、伊太利國立の翰林院アカデミアの一員として「閣下」の稱號を受けてゐる。

さて「死せるバスカル」は一九〇四年に出版されてゐるが、その一・二年前から月刊雜誌に掲載されたものと考へられる。彼は、此の本が一九二一年に再版される時、「空想力の缺乏に關する覚え書」と題する跋文を書いてゐる。是に依れば、人生に於ける馬鹿げたこと、ありさうもないことが、事實あり得ることを、新聞記事を掲げて證明してゐる。即ち此の作品の非眞實性に就いて、多くの批評家でありさうもないこととして非難した問題に對する反駁であり、彼の人生觀・藝術觀の一端を説いたものでもある。

「米國合衆國のバッファロー市のアルバート・ハインツ氏は、妻と二十歳の女との戀の板挟みに逢着して、その解決策のために、熟慮の末或る場所へ此の二人を呼び寄せた。

二人の女とハインツ氏は、時をたがへず集り、長い間議論の結果、遂に意見の一致を見た。

彼等は三人共死なうと決心したのである。ハインツ夫人は歸宅して、短銃自殺をしまつた。ハインツ氏と彼の戀人の二十歳の女は、ハインツ夫人の死に依つて一切の障碍が取り去られ、彼等の結婚が容易になり、自殺する理由が既になくなつたのを認め、此の世に生き残つて夫婦にならうと決心した。然し官憲は、彼等と反對な見方をして、二人を拘引したのだつた。

是は實に下劣極まる決定である。」

(一九二二年一月二十五日の紐育朝刊諸新聞参照)

x

「或る不幸な劇作家が、是に似通つた事件を舞臺にのぼせようと云ふ不運なインスピレーションを持つたことを想像して見よう。」

かうしてピランデルロは、如何なる劇作家が、此のハインツ夫人の自殺のありさうもない馬鹿々々しさを除かうと工夫しても、如何にそれが困難であるかを感じるばかりか、一方批評家は、此の劇を見ても、こんな馬鹿げたことがあるものかと云ふであらうと書いてゐる。所が人生はありさうもない馬鹿げたことに満ちてゐるのである。

「人生の馬鹿げた無稽さは、それが本當らしく思はれる必要はない。それが本當だからである。是に反して藝術上の馬鹿げた無稽さは、それが人に本當に思はれるために、本當らしく工夫する必要はある。然る時は、本當らしいことは、馬鹿げた無稽ではない。」

x

人生の一事件は馬鹿げた無稽でもかまはない。藝術品は、藝術品である以上、それではいけない。」

「自然の歴史のうちには、動物學に依つて研究された一つの世界がある。云ふ迄もなく動物が澤山ゐるからである。多くの動物の中には、人間も一員として含まれてゐる。

そして、左様、動物學者は、例へば人間は四足動物ではなく二足動物であり、猿や驢馬や孔雀のやうに尻尾がないと云ひもし説明することが出来る。

動物學者の説明する人間には、例へば片足をなくして、そこへ木の足をはめこんだり、片目をなくして硝子の目玉

をはめこんだりする人間の不幸を考へることが出来ない。動物學者の人間は、何時も、決して木なんかの足をしてゐない二本の足をし、決して硝子の目玉なんかをしてゐない二個の肉眼をそなへてゐる。

そして此の動物學者に反對することは不可能である。何故なら動物學者は、彼の前に木の足をし硝子の目玉をした人間があらはれても、自分はこんな男は知らない、此の男は、人間一般ではなく一人の人間だからと答へるからである。

然しながら我々の立場から云へば、我々すべては、動物學者に向つて、彼が知つてゐるやうな人類と云ふものは存在しない、その反對に如何なる者も決して同じと云ふわけには行かない人間、そして不幸にも木の足や硝子の目玉を持つことさへもあり得る人間たちと云ふものが存在してゐると云ふことが出来る。」

かうしてピランデルロは、動物學者を批評家にとへてゐるのである。そして長々と人生の特異性に就いて論じてから、最後に次のやうに書いてゐる。

「然しながら私は、再び版を重ねようとしてゐる此の私の長篇『死せるバスカル』の最初の出版から、約二十年と云ふ歲月が経つた今、或る大きな慰さめを實際の人生から、即ち日刊新聞から與へられた。」

「それは、一九二〇年三月二十七日の『コリエール・デラ・セーラ』紙に書かれてゐる通りである。

### 自分の墓へお詣りする。

夫の死が斷定された結果の二重結婚事件が最近明らかにされた。簡単に前へ溯れば、一九一六年十二月二十六日カルヴァリアーテ區に於て百姓達が栗色の上衣を着、同色のズボンをはいた男の死骸を、チンクエ・キユイゼ運河の水中から引き上げた。是は警官に通告され訊問が開始された。間もなく、四十を少し越えてゐるがまだ色つばいマリヤ・テデスキと云ふ女と、ルイーヂ・ロンゴニ及びルイーヂ・マイオリと云ふ男から、此の死骸は、一八六九年生

れのテデスキの夫、電気技師アムブロージョ・カザーティの死骸であると斷言された。事實、溺死人は非常にカザーティに似てゐた。

此の證言は現在の結果から見て、特にマイオーリとテデスキに取つて、多少の利益になつたであらう。實は眞のカザーティは生きてゐたからだ！ 然しながら彼は、所有權に關する犯罪で、前年の二月二十一日からまだ刑務所に入つてゐたし、それに法律的にはないが、大分前から妻とは別居生活をしてゐた。服喪の七ヶ月が終つて、テデスキは手續き上の如何なる困難にもぶつつかることなく、マイオーリと新婚生活に入つた。カザーティは一九一七年三月八日に刑期をすました。そして最近に至つて漸く、自分が死んでゐること、自分の妻が再婚して消えてなくなつてゐるのを知つた。或る書類の必要から、ミッソーリ廣場にある國勢調査局へ行つた時、彼はすべてを知つたのだつた。事務員は窓口のところで頑強に云つた。

『然し貴方は死んでゐるんです！ 貴方の法律的な住所はムゾッコ墓地公共區第四十四、五百五十五號の墓になつてます……』

生きてゐる事をはつきりさせて貰はうとした彼のあらゆる抗議は無駄だつた。カザーティは自分の……甦生に對する權利を認めさせようと努力した、従つて彼の戸籍が訂正せられる場合には、假りの未亡人の再婚は無効になるであらう。

然しカザーティは此の奇妙な事件を悲しいとは思はなかつた。むしろ彼の氣持を上機嫌にさへしたと云へるであらう。新たな感情を味はうとした彼は、自らの墓に……親愛の情を示さうと考へた。そして彼の過去に敬意を表するために墓には花束をさまげ、祈りの灯を立てたのだつた！（以上新聞記事）



運河の中で自殺したと推定されたこと、引き上げられた死骸が、妻と彼女の夫にならうと云ふ男から認定されたこと、死んだと思つた夫が歸つて來たこと、然も自らの墓へお詣りしたこと！ 勿論事實と云ふものに普遍的に、人間の價値と感じを與へるものがなくても、是等はすべて實際に起つた事實である。

電氣技師アムブロージョ・カザーティが、私の此の小説を読み、そして死んだマッティーヤ・パスカルを眞似て、自らの墓へ出かけたかどうか私は知らない。

然るに人生は一切のありさうなことを輕蔑してしまつた。夫カザーティ氏は、地面の下にゐたのではなく、刑務所にゐたんだから、消息を知るのは極めて容易であつたにもかゝらず、一寸した事實を調査もしないで、マイオーリ氏とテデスキ夫人の結婚には、市長が現れる僧侶が現れると云ふことになつてしまつたのである。」

此のピランデルロの序を読み、かうした事實が現にあつたことを思ふと、實際の人生に於て、如何に人間の空想力が不足してゐるか分る。従つて、一つの作品の奇抜さ、現實にはありさうもない事について、空想力の不足した頭腦を以て非難することは憤まねばならぬ。此の意味で此の「死せるパスカル」の非現實性——若し讀者が少しでもそれを感じたならば——は、決して非現實ではなく、現實として千金の重味を持つてゐると斷言する次第である。

彼の全作品は、フィレンツェのベムボラッド書店から出版されてゐるので、左に記録する。但し譯名について或ひは不適當のものがあるかも知れないが、豫めお斷りして置く。

《長篇小説》

「轉回」(Il turno)